

令和元年度産学連携事業「社会スタディ」開催報告

公益社団法人 私立大学情報教育協会

「情報通信技術を活用して新しい価値の創出の重要性に気づいていただき、早い段階から発展的な学びが展開できることを支援する」ことを目的に地方の学生も参加しやすいようにネット参加を可能にして全国の国・公・私立大学の1・2年生に参加を呼びかけたところ、会場参加18大学42名、ネット参加12大学30名の合計72名が参加した。以下に概要を報告する。

1. 開催目的

社会スタディで、情報通信技術を活用して新しい価値の創出の重要性に気づいていただき、早い段階から発展的な学びが展開できることを目指している。

2. 開催日時・場所

日時：令和2年2月12日（水）12時30分、場所：株式会社 内田洋行 ユビキタス協創広場 CANVAS

3. 参加者

会場参加42名 ネット参加37名

4. 参加者の内容

(1) 会場参加

参加者は18大学42名、1年生45%、2年生55%、男性51%、女性49%、学部別では情報・理工系学部33%、経済・経営10%、メディア系24%、家政系5%、人文社会系7%、法学系21%などであった。

(2) ネット参加

ネット参加は12大学37名、1年生48%、2年生52%、男性63%、女性37%、学部別では情報・理工系学部40%、経済・経営20%、家政系7%、人文社会系30%などであった。

5. プログラム概要

12:00	12:00～12:30 受付開始
12:30	開会挨拶
12:35	社会スタディの進め方について
12:50	1. 有識者からの情報提供、質疑応答、補足説明 (1) さあチャレンジを始めよう“未来は君たちの手にある”-AIと社会イノベーション- 須藤 修 氏 (東京大学 大学院 情報学環 教授) ※ IoTやAIなどデジタル技術をベースに産業や社会の在り方は大きく変わろうとしている。インド、中国、米国などでは新しい発想によるイノベーションやスタートアップ(起業)が桁違いの生産性向上や新たな消費をもたらしている。これからの社会を変えていく主役は従来にとられないイノベーションにチャレンジする君たちである。
13:45	(休憩) 13:45～13:55 (10分)
13:55	(2) 価値を創り出すイノベーションとは 小西 一有 氏 (合同会社タッチコア 代表 九州工業大学 客員教授) ※ デジタル革命が進展していく中で成功するには新たな価値を生み出す様々なイノベーションが求められている。今まで日本が得意としてきた「問題解決のイノベーション」だけでなく、「モノからコト」へのような人々の生活の豊かさや幸せ感をもたらす「意味のイノベーション」が避けられなくなっている。
14:50	(3) AIを活用する力 永井 浩史 氏 (富士通株式会社 Data×AI 事業本部 ディレクター) ※ 10年先・20年先の社会を予測し、そこから現在を考えてイノベーションに取り組む考え方と現場を見て、デザインし、コンセプトを検証する思考方法を身に付けてほしい。「未来洞察力」と「場のデザイン力」を組み合わせることが「AIを活用した価値創造に必要な思考のフレームワーク」である。
15:45	(休憩) 15:45～15:55 (10分)
15:55	2. 気づきの整理と発展 (1) 気づきの整理と発展のためのグループ討議 ※ グループで「情報通信技術を活用して未来社会にどのように向きあうか」について考える。
17:15	(2) 気づきの発表 ※ グループごとにまとめた結果を代表者が発表する。
17:30	閉会挨拶

6. 有識者からの情報提供の概要

(1) 「さあチャレンジを始めよう “未来は君たちの手にある” -AI と社会イノベーション-

須藤 修 氏 (東京大学 大学院 情報学環 教授)

世界では、IBM、Google、中国研究機関などが非常に高度な競争を展開しており、地球的規模で大変動が起きようとしている。AI の利用は自由、尊厳、平等、安全性及び持続可能性の向上など「人間中心の社会原則」を尊厳することが極めて重要である。これからの社会に必要なのは、AI を正しく利用できる素養・知識・倫理を持つことである。未来は若い君たちの手にあるので、文理の境界を超え、新しい社会の創造に向けたスキル習得や社会的実践を通じて「AI に負けない叡智」を培ってほしいことが紹介された。



(2) 「価値を創り出すイノベーションとは」

小西 一有 氏 (合同会社タッチコア 代表 九州工業大学 客員教授)

今まで日本が得意としてきた「問題解決のイノベーション」だけでなく「モノからコト」へのような人々の生活の豊かさや幸せをもたらす「意味のイノベーション」が避けられなくなっている。例えば、ロウソク は「暗いところを明るくする」ものであったが、Yankee Candle は「癒し」、「疲労回復」、「明日への活力」など全く新しい価値を創造した。これが「意味のイノベーション」である。また、写真は、過去を偲ぶモノから、時間の共有やメッセージを送るツールに変化しているが、これに対応できなかった米国のイーストマン・コダック社は倒産した。新しい価値を創り出し、成功していくには、経験するという価値に気づき、永く愛される商品やサービスの創造にチャレンジしてほしいことが紹介された。



(3) 「AI を活用する力」

永井 浩史 氏 (富士通株式会社 Data×AI 事業本部 ディレクター)

北米・欧州・中国などを中心にグローバルな AI の社会実装と巨額な投資、DX (デジタル・トランスフォーメーション) による大規模な変革が進んでいるが、日本の取組みは遅れている。これに打ち勝つには AI、IoT ビッグデータ、量子コンピュータなどの開発や実装の加速が不可欠であり、これから勝負である。AI 活用には、観察・試作・検証の「場をデザインする力」と未来を考えて今を考える「未来洞察力」が必要であり、AI に苦手意識を持たないで活用する素養を身に付けてほしいことが紹介された。



7. 気づきの整理と発展

質疑応答では、自分の意見をもって批判的に捉える学生の質問も多く見られ、参加学生の高い意識が確認された。また、気づきの整理と発展では、情報提供を受けて何が重要であったかを3名1組のグループで整理した後、5~6名のグループに拡大し「未来社会にどのように向き合うか」について、個々の学生がイメージする考えや夢を意見交換した。どのグループも熱心に議論が交わされており、最後に各グループから3分程度発表させたところ、ICTを活用した「ドローン宅配」、「空き家対策としての古民家カフェ」、「高齢化社会の問題解決」などにイノベーションの課題があることが報告された。他方、アンケートの感想として、「AI や ICT は道具であり意思をもって使いこなす必要性を理解した」、「目的意識をもって未来を想定し、今を考える問題解決思考の重要性を感じた」、「イノベーションは技術革新と考えていた今までの認識の誤りに気づき、新たな価値創造の可能性を感じた」などの感想が寄せられた。



8. 学びの成果の確認

参加者から2月末までに提出された「学びの成果報告書」(A4 サイズ1枚程度)は会場参加者32名、ネット参加者5名であった。報告された成果物を本協会の産学連携プロジェクト推進小委員会で審査した結果、会場参加者32名には修了証、ネット参加者5名にはネット参加修了を発行した。また、特に優秀と認められた会場参加者6名には「優秀証」を発行し所属大学長に報告した。